
俺はお前が大嫌い！

タネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺はお前が大嫌い！

【Nコード】

N9088Q

【作者名】

タネ

【あらすじ】

幼少期のトラウマを持つ袴田誠はその日、悪夢によって目を覚ま
す。

公園の砂場そこには少年と少女が立っていた。

そして、少年は泣いていた。

『やめて！やめてよ！』

少女は両手で少年の髪を引っ張り回している。

『うるさいわねえ！アンタを見てると私イライラするの！』

そう言って少女は少年を砂場に叩き付ける。

少年は顔面を砂場に打ち付け涙で砂がつき顔は泥だらけである。

しかし、少女は追い撃ちをかけるように少年の頭を踏み付けた。

『ングウ！』

『私がアンタの泣く癖を直してあげてるのよ、感謝しなさい！』

そう言って少女は更に少年の脇腹に蹴りをいれた。

その蹴りが決定打となったのか少年の視界は歪み、そしてゆっくりと暗くなっていった。

「うわっ！」

ベットから飛び起きた青年は周りを見回し頭を抱える。

「ちくしょう…最悪だ。」

青年の名前は袴田誠^{ハカマダ マコト}16歳の高校1年生、そして先程の“夢”の少年である。

誠は頭をボリボリと掻き時計を見る、時間は朝の7時前でアラームが鳴るまでまだ10分以上もあつた。

しかし、寝覚めの悪さもあり誠は仕方なくベットから降り顔を洗いに洗面所へと歩きだした。

顔を洗い眠気を覚ました誠、リビングに入るとそこには朝食を作る

母親の姿があった。

「…おはよう。」

「あら、おはよう今日は随分と早いね、ってアンタなんで朝っぱらから機嫌悪そうな顔してんのよ。」

誠は母親に言われるまで気づかなかったが、かなり不機嫌な顔をしていた。

「最悪の夢を見たんだよ。」

「何それ？…どんな夢よ。」

「人に言いたくない夢。」

「はあ何それ？」

誠は母親の問い掛けに答えず食卓に座った。

テレビはちょうど星座占いをしていて誠の星座は見事に最下位だった。

「ああー！クソッなんで今日に限ってあんな夢を…もう10年も前

の事なのに…」

通学中、誠は夢の事を思い返していた。

少女の名前はイチノセ一之瀬憐、誠にとっては幼なじみと言うやつだ。

憐は所謂美少女で頭も良く友達も沢山いた。

しかし、少女の誰も知らない一面を誠は知っていた、それが先程の夢である。

憐は誠と2人きりになると罵倒混じりの暴力を振るっていた。

理由は誠にもわからない、しかし憐は毎日の様に誠をイジメ倒し酷いときは物で殴られることもあった。

当然、誠は両親にイジメの事を話したこともあった、しかし所詮は子供のケンカ、しかも相手は幼なじみの女の子だからと取り合ってはくれなかった。

結局、誠は幼稚園から小学1年生で引越すまでの4年間も憐の暴力に耐えつづける事になる。

そして、その幼少期のトラウマは現在も影を落とし誠は軽い女性恐怖症になってしまったのであった。結局、誠は学校に到着するまでその事が頭から離れる事はなかった。

教室に着いても未だに誠の頭はモヤモヤしていた。

まだ疎らな教室、誠は自分の席につき「はぁ〜」とため息をついた。

その時

「マツコトー！」

1人の男子生徒が誠の名前を叫び飛びついてきた。

「なっ！」

当然、誠は突然の出来事に対応できず男子を受け止める形になってしまった。

ガッシャーン！と大きな音を発て椅子から転げ落ちる誠とその上に被さる男子。

「いつてえな！退けこのヤロー！」

誠は男子の顔面を掴み引き剥がすが

「そんな事、言うなよお！約2日ぶりの親友との再会なんだぞ！寂しくて死んじゃう所だったんだぞ！」

「ああ、だったらそのまま孤独死してろ！」

そんな時、誠に手が差し延べられた。

「マコ、大丈夫？」

「ん？ああ潤か、手を差し延べるより先にコイツをどうにかしてくれ。」

「ああ、そうだね！ホラッ健、マコが痛そうだよ。」

そう言って青年は被さる男子の衿を掴み誠から引き離れた。

誠に飛びついてきた男子の名前は坂下健^{サカシタケン}、誠とは中学からの腐れ縁で悪友である。

そして、それを引き剥がしたのが多野神潤^{タノガミジユン}、同じく腐れ縁の友人である。

「サンキュー潤！それと健、テメエは朝から騒々しいんだよ！」

誠は怒りの形相で健を睨むが

「まあまあ怒らないでよマコ、健がテンション高いのにも理由があるんだよ。」

「理由？「そうなんだよお！誠聞いてくれよお！」…だから引っ付くなって言っただろーがあ！」

こうして誠の騒がしい学校が始まった。

「…転校生？」

「ああ、それも超美女！校章も俺達と同じ色だったから同級生だぜ！」

「で？」

「で？って普通はテンション上がるだろ！」

健が熱く語る中、誠は潤に目配せをする。

「ホラホラ、健ちよつと落ち着いて。」

潤が健を席に座らせた。

「そんなに美人なのか潤？」

「ああ確かに美人だったねえ。僕も思わず見取れてしまったよ。」

「ふゝん、潤が言うなら間違いないか…」

「だから、言つたる超美女だつて…」

またまた健が熱く語り始めようとした時、教室の扉が開き担任の教師が入ってきた。

「おゝいHR始めるぞお。」

そこで健の話は中断され誠はやっと一息つくのだった。

「えゝ今日からこのクラスに転校生が」

（健が言つてた娘このクラスなんだ、まあどうでもいいけど）
若干女性恐怖症の誠はそんな事を考えながらシャーペンでペン回しをしていた。

「先生！その子は男ですか女ですかー！」

と健は教師に質問する。

（てか、お前知ってんじゃない！）

「男子は喜べ転校生は女の子だ！」

それを聞いてクラスの男子のテンションが上がる。

まあ1番うるさいのはやっぱり健なのだが…

「あんまり勿体振ってもアレだから…入ってきなさい！」

そう言って教師が呼ぶとガラガラと音を発てて1人の女子生徒が教室に入ってきた。

教室のボルテージが最高潮になるなか誠は

カチャンッ！

ペンを落とし絶句していた。

なぜなら…

「初めまして、――之瀬憐です！皆さん仲良くしてくださいね！」

そこにいたのは……トラウマの元凶だったから……

なにせこの世で1番会いたくなかった人間が目の前にいるのだから……

（… そうだ！ 虐められたって言っても、それは10年も前の話だ奴が覚えてるはずねえ… そうだ、そうに決まってる！）

（席は何処だ？）

つまり必然的に転校生は最後尾ということになる、因みに誠の席は最後尾の窓側である。

（ヨッシャー！これなら同じクラスでも知らないふりができる。）

心の中で誠はガツポーズする誠。

「それじゃあ一之瀬はあそこの席だ。」

教師が憐を促す。

（そうだ！お前の席はそこだ！）

内心テンションが上がる誠、しかし憐の一言で誠は固まる。

「先生、私は窓側が良いんですけどダメですか？」

（はっ？）

「そうか、別に構わんが。おい、誰か一之瀬の机運んでやれ。」

「ハイ！俺がやります！」

すると、突然誠の隣の健が立ち上がりそう言った。

「ちよっ！おい健！」

当然慌てる誠、しかし健は小声で…

「やったな誠、美少女転校生は俺達の後ろだぜ。」

時既に遅し、健は駆け足で机を運んでしまった。

そして…一之瀬憐が自らの席に座るため歩きはじめた。

一步また一步と憐が近づく…そんな中、誠は固まっていた。

冷や汗が止まらない。

そして、憐が誠の横を通過した。

「机ありがとう！貴方は？」

「俺は坂下健！気軽に健って呼んでね憐ちゃん！」

そう言っただけは憐と握手を交わす。

そして…

「ねえ君。」

憐は誠に声を掛けた。

その瞬間、誠はあからさまにびくつく。

「おい誠、憐ちゃんが呼んでるぞ。」

（バカッ！わざと無視してんのに何と言っ事を…）

「誠くんって言うんだ初めましてよろしくね！」

そう言っただけは誠の背後から手が伸びた。

（クソッ！誠くんだと…ちょっと待て今コイツ初めましてって言ったよな…ってことは…俺の事…忘れてる？）

その瞬間、誠は歓喜した。

（ここを上手くやり過ぐせばどうにでもなる！なんなら次の授業から誰かに席を交換してもらえば…美少女転校生の前の席だ！誰でも替わってくれるぜ！）

そう思った時、誠から緊張の二文字は消えた。

誠は立ち上がり憐に向かい立つ、そして握手をして…

「俺は誠だ、よろし…」

自己紹介をしている時だった。
グイッ！

「おわっ！」

突然、誠は憐に手を引かれ体勢を崩し憐の方へ…そして

チュッ…

誠はそのまま唇を…奪われた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9088q/>

俺はお前が大嫌い！

2011年3月22日00時11分発行